

変わる日本の暮らしと「まち」

no.52

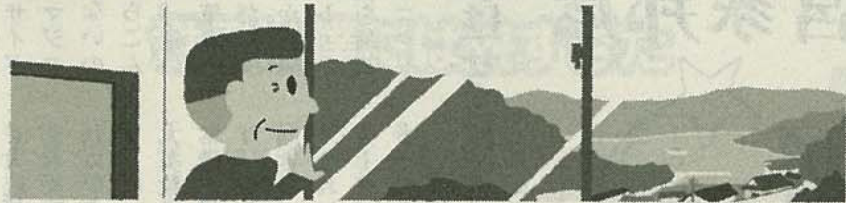
阿部民子

Abe Tamiko

illustration: Shigeyuki Sakata

震災で失われた住処と生業 生きるために欠かせない二つを同時に復興

岩手県釜石市花露辺地区・震災復興事業 (2012年から2016年2月事業完了)



岩手県釜石市の中心部から車で約20分。リアス式海岸特有の切り立った山と海に抱かれた花露辺地区は、ウニやアワビ、養殖ワカメやホタテで栄えてきた天然の良港だ。住民の90%以上が漁業を生業としてこの地区にも、東日本大震災は甚大な被害をもたらした。68世帯中、約半数の31世帯が被災。漁師の命綱である漁船も、1艘を残してすべてが流された。

震災当日の夜、避難所になった漁村センターで、当時の町内会長下村恵寿さんは、失意の住民を前にこう切り出した。「この町はこんなになってしまったけど、またここに帰ってきて、ここで死ぬべし？」

その声に、大勢の町民が「そうだ！俺たちはここで生きるしかない」と力強く答えたという。その一言から、花露辺の復興への歩みは始まった。

団結力とリーダーシップが力に

「もともと、この地区には大きなイカ釣り漁船が10艘あって、船主を中心に家族のようなまとまりがありました。地区対抗の運動会が

あった頃は、大漁旗を立てて乗り込み、住民が一丸となって優勝のために団結する。子供心に、「ほんとにこの地区はすごい」と思っただけです」と下村前町内会長。その団結力が、復興の大きな原動力となった。

震災当日には、早くも炊き出しを開始。漁船の集魚灯を灯して暖をとる、68世帯198名の住民のうち134名がそろって食事をしたという。避難所で暮らした1か月の間、住民が冷凍庫に入っていたウニやアワビを持ち寄り、日常より豪華な食事が並んだのも、いまでは笑い話だ。そうして「同じ釜の飯」を食べるうちに、自然と住民の復興への意志や計画が固まっていた。

「ここで漁師を続けるために何が必要か、どんな暮らしをしていくか。そのための希望や意欲を持つるまちづくりをいちはんに考えました」と下村前町内会長は、まちづくりの経緯を話す。

当初は、住民の多くが防波堤が必要だと考えていた。ところが、話し合いを進めるうちに、漁業の作業用地がなくなることや建設中



に漁ができないこと、さらには海が見えないことで漁の状況判断ができなくなる、などのマイナス面が判明。造ることの弊害のほうが多い、という判断から、防波堤を造らないとの結論に至った。その代わりに、低地と住宅地の間に海抜16メートルの道路を建設して堤防代わりにし、低地部は漁業の作業場にするなど、具体的な復興計画を住民一致で作成。12月には岩手県で初めて行政・住民間で合意、他地区に先駆けてのまちづくりが始まった。

漁業従事者のためのまちづくり

釜石市の要請を受け、復興計画の実現に向けて動いたのがUR都市機構だ。まずは住まいの確保をと、自力再建住宅用の宅地4区画と13戸分の災害公営住宅の建設に着手した。UR釜石復興支援事務

(PR)

所長の安藤誉和は語る。

「漁業従事者の方々が住みやすいよう、何度も話し合いを重ねて設計を行いました。たとえば、エントランス脇に漁具などの塩分を洗い流す「かけ下げ」というスペースを設けたり、漁具を置いたり簡単な作業ができるように、ベランダや廊下などのスペースに配慮しました。集会室は海がよく見える場所に配置するほか、トイレや共用のキッチンなども完備し、災害時の避難所としても機能するようにしました」

震災から3年目の正月は新しい家で迎えたい、という住民の強い要望で、工事は急ピッチで進められた。施工にあたり、土木建設の白倉伸昭さんは語る。

「建築用地は集落の一番高台、海抜60メートルの漁村センターを取

り壊した場所でした。ここは非常に急峻な崖のような場所、最初に見たときは「ここに本当に建てるのか」と思いましたね。でも、地盤がしっかりしていたので、なんとか無事に工事を進めることができました。現場の苦労が実り、要望通りの2013年12月、無事住民へと引き渡された。夫婦で入居した葛西登さんは「夏は涼しい、冬はあったけです、住み心地は最高だね。窓からはすぐ海が見える、毎朝海見えるのさ、あ、今日は波あるな、今日は風吹いてるなとかね」と満足げな笑顔を見せる。

生業の再生こそ生きる道

次に取りかかったのが、生業。漁業復興への事業だ。漁業復興のリーダーを務めた漁協理事の大瀬司さんは「被災した直後はおかも海も瓦礫だらけで、復興できるのかと途方にくれたね。でも、みんなの協力で後片付けが進み、日を追って先が見えてきた。当初は船も漁具もなかったけど、漁業を建てなおさねばという思いだけでやってきた。強力でリーダーシップ

をとってくれた下村前町内会長には、言葉に表せないくらい感謝してるね」と振り返る。

花露辺地区の主な収入源は養殖ワカメだが、ボイル・塩蔵加工をする、生ワカメのまま出荷するのに比べて、3〜4倍近い値がつく。そのため作業場は、漁師の収入確保だけでなく、高齢者の働き場所や生業が再生のために、一日も早い復興が望まれた。

その願いに応え、2014年1月には作業場となる平場が先行完成。続いて道路の造成なども進み、平成27年度にはすべての工事が完了した。土木工事を担当した、土木建設の末松泰三さんは話す。

「この地区は少し掘ると大きな岩盤がでて、そこを壊しながら新たに盛り土をするなど特有の苦勞もありましたが、市とUR、我々ゼネコンが三位一体となって進められました」。

前述の白倉さんも言葉を継ぐ。「工事は終わりましたが、こんなに密に現場に入っていた仕事は初めて。地元の方とは近所さんのような付き合いをさせていただ

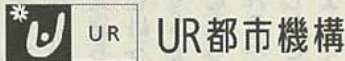
たので、今度はラグビーワールドカップ開催に合わせてぜひ訪れたいですね」

UR釜石復興支援事務所の市街地整備課 神谷泰彦は「事業を完了できたのは、何よりも地元のコミュニティーのおかげです。この土地を使って、住民の方が一日も早く日常を取り戻せる助けになれば」と語る。

前述のUR釜石復興支援事務所 長、安藤誉和も「我々の仕事は単にハードを整えるだけでなく、有効に使っていただくソフト面も大事だと思っています。決してしゃべらず、住民の方々の背中をそっと押す、そんな役割になれたらいいですね」と話す。

震災から5年がたったこの7月18日、「復興支援への感謝の夏祭」が盛大に開かれた。住む場所と生業。生きるためになくてはならない2つの復興を果たした花露辺のまちに、明るい笑顔とにぎわいがようやく戻ってきた。

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社

本シリーズの感想をお寄せ下さい。宛先は〒162-8711 東京都新宿区矢来町71 株式会社新潮社広告部 変わる日本の「暮らし」と「まち」係まで。次回は9月1日号(8月25日発売予定)にて掲載いたします。バックナンバーは、UR都市機構ホームページ(www.ur-net.go.jp/info/change/)に掲載しています。

(PR)